死にたがりの声

流郷進一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりの声

【Ｎコード】

Ｎ３２８０Ｚ

【作者名】

流郷進一

【あらすじ】

色々な人間模様が綴られていく予定です。

死にたがりの声

「氷山筑紫（ひやまつくし）くん、十八歳。学年が上がった時から大学受験のため律儀に勉学に励むも、最中にその言い知れない感情に駆られて自分の人生に疑問を抱き、ドロップアウトする。現在はそこそこ収入に恵まれた両親の庇護のもとで将来に何の希望も持てず、ただダラダラと寿命を消費する毎日を送っている、と」

女性は片手に持った手帳に目を通しながら、一息にそう言い切ると。

「話を受けた私個人としての総括は大体こんな感じなんだが、聞いていてどこか訂正したかった箇所はあるかい？」

手帳から顔を上げ、薄いレンズ越しに覗く涼しげな眼を、真っ直ぐ僕の方へと向けてきた。

彼女の言ったそこそこ裕福な家庭を象徴するかのような広めのリビングの、テーブルを挟んで向かい合う柔らかなソファに座りながらのやり取りだ。

「いや、その通りです。特に無いです」

「そう、良かった。だったらやはり気にしなければならないのは、言い知れぬ感情、とやらのことだろうね。そこをもう少し掘り下げていこうか」

そう言うと再び手元の手帳に視線を落とし、手先の滑らかな動きで何かを書き記していく。

僕は――。

その間、どこか怪訝な表情をしていた、のだと思う。

「ん？」

メモを終えた彼女が少しばかりその眼を丸くして、作り物のような透き通った声で僕に尋ねた。

「ははっ。まぁ、訝しむのも無理のないことだと思うよ。ネットの簡易投稿サービスでひたすら壁を殴るような言葉を吐いていたら見

知らぬ人物に突然コンタクトを取られて、悩みがあるなら聞こうじゃないか、ときたもんだからね。警戒するのは当然だ、と言っても……」

家に上げてからというのは、些か鈍感な反応だと思うけどね、と妙に格式ばった装飾物の整頓された部屋を見渡しながら笑った。

綺麗だが、彫刻のような冷たさのある顔。長く伸ばした艶のある黒髪。とても落ち着いた雰囲気があるけど、年齢はよく分からない。それでも多分、成人はしているのだと思う。

初対面の印象は――その、僕には分不相応の過ぎる容貌にも圧倒されたが、それ以上に、理知的で、どちらかと言えば冷徹な、機械のような人だと思って、少し怖かった。

雪のように白い、体温を感じさせない色の肌と言い、あまりにも、人間離れしていたからだ。

しかし蓋を開けてみればそれはどうやら印象に過ぎなかったらしく、その振る舞いは決してふざけているわけではないが、余裕に溢れていて、よく笑顔を見せる。

待ち合わせ場所に――外に出ることを想像しただけで赤面し、鏡の前で服装に四苦八苦する内に発汗してしまうような僕が、とても話しやすいと思える人だった。

それでも。

彼女が述べた通り、その邂逅は余りにも唐突で、言ってしまえば異常なものだ。

思い切って信じたい、胸中を打ち明けたいのにそう出来ない――昔から僕の邪魔をしてきたこの臆病な警戒心が、そのような場面において働かないわけがない。

それじゃあもうちょっとだけお話をしようか、と彼女は作り物のような声で、どこか優しさを含ませながら言った。

「キミの疑問が解けるまで、どんな質問でもしていいよ。まぁ先に断っておくと、プライベート方面の面白い話は全くないけどね。これといった付き合いのない、仕事場で寂しい一人暮らしさ」

言いながら、自分で笑う。その外見と比べて、笑い声はとても自然なものように、僕には聞こえる。
僕は。
「仕事って、一体どんな……？」
そう訊いた。
「メールでやり取りした時にも伝えたと思うけど、じゃあもう一度言おうか」
愚昧極まりない質問に、これといって嫌がる素振りも見せずに、彼女はソファの上で一度背筋を伸ばした。
「取りあえず掲げている看板には、天宮人生相談所、と外連味に欠ける記号が乗っているよ。実態もまぁ、大袈裟なものじゃない。困っている人の所に出向いて、場合に拠ってはご足労頂いて、話を聞いて出来る助言があればする。料金も大した額じゃない。今時なら中学生のお小遣いでも済む程度だ。それで少しでも救われる人がいるなら、と思ってるけど、実際どれだけ貢献できてるかは分からない」
最後の方は苦笑が混じっていた。僕は不必要に慌てて、何も知らないくせにそんなこと無いですよなどと言ってしまう。
でも本当に、彼女が本当に待っていてくれた時、その事実だけで僕は僅かながら助けられた気にもなったのだ。
声もかすれ気味で、フォローにもならない小人の醜態を、それでも彼女は有難うと言葉にして感謝した。
「でも、それはキミの警戒網をほどくだけの情報にはなり得ないね。嘘を言っているかもしれない。疑いの証拠を提示するのは簡単だが、その逆は往々にして難しい。さて、どうしたものか……」
「いや、もういいですよ」
ん？　と彼女が疑問を如実に浮かべた顔をする。
そして、僕は自分から切り出したくせに赤面した。これ以上の説明はいらないと思ったのは本心だったけど、果たして今のタイミングで、今の言葉選びで正しかったのか、もっと良い伝え方があった

んじゃないか、そうやって過去を何度も反芻して探っていく度に落ち込んでいく。
僕の、いつもの癖だった。
「信用してくれるのかい？」
彼女のフォローは簡潔で、自身にあふれていて、分かり易い。
「ええ、と言うより仮に貴女が碌でもない人物だったとして、もうどうでも良いというか……」
たとえば彼女が巷に無数に溢れている危険で奇怪な集団の勧誘員だったとして。
まともな武器を持つことも出来ず、常にひたすら身を屈めて自衛を図っていたような僕にももう一つの、投げ遣りな諦観を持つ一面があった。
ここで勧誘を断り続けても、家の住所が団体に漏れたりすれば、こんな子供を抱えた憐れな両親にだって必ず迷惑が掛かる。祖父母やその他の血縁者にまで影響が広がるかもしれない。
到底自分一人ではケアし切れない被害が出るかも知れない、けど。
それがどうしたと言うのだろう。
それを防いだからと言って、僕のこれからに何か変化があるのだろうか。
それを防がなかったからと言って、僕に何か不都合があるのだろうか。
生活が不自由になろうと、どこの誰から恨まれようと、そんなもの――。
――全部、承知の上じゃないか。
「それは話の運びとしてはとても都合が良いけど、キミの人生にとっては結構な障害になる価値観だね」
雰囲気が一変する。氷のような表情にユーモアを含ませていた口調が、神妙なものになる。
「どうしてそう思うんですか？」
僕は言う。

「だって、そうじゃないですか。誰かに迷惑が掛かるから駄目だとか、一人前の人間としてどうあるべきだとか、それを守らなかったからってどうなるんですか？　守ったらどうだっていうんですか？　そんなことに固執する人間に好かれるか、嫌われるかっていうだけの問題でしょう？　僕はそんな人にどう思われようと、どうでもいいんです。そう考えたら、今まで真面目にやっていたことが全部馬鹿馬鹿しくなったんです。そう考えたら……」

息が荒れて、顔面が茹蛸みたいに紅潮したみっともない顔で。

「人生自体が意味の無いような、下らないことしか無いようなものに思えて、とても悲しいんです」

言い続けている間、僕はずっと彼女から目を反らしていた。誰かの目を見て話すことなんて出来ない――彼女の瞳は、射竦められそうで、尚更だった。

本当に、恰好悪いことこの上ない。

でも僕のこの考えは間違ってない。確信がある。

倫理、道徳、常識なんてものは――人間としての尊厳を保つための模範と言うよりも、それを逸脱した者を叩くため、他人を傷付けるという背徳の快感を肯定的に得るための免罪符としての働きしかない。

その統率機能自体のミスには誰も関心がない。仮に気付いても見なかったことにする、何故なら――。

人はそれほど器用ではないし、清潔でもないからだ。

人という存在で居るためには、人は欠陥だらけだ。

下らない。

本当に下らない。

大学に入って、社会人になって、その先に一体何があるというのだろう？

「人生というものそれ自体に、意味は無いよ」

彼女が最初の時のような口調に戻って言う。

僕は、その言葉の意味を汲み取ることが、直ぐには出来なかった。

「え……？」
「生きてれば良いことがあるだとか、人生は本来素晴らしいものだとか、そういう戯言はあちこちで囁かれているけどね。そんなものに耳を貸す必要なんて無いのさ。ああいうのは能天気が能天気宛に発信する自己満足だからね。人生をただ一つの事象として見た時に、その属性をつけるのは自分しかいないんだよ」
僕は顔を上げる。彼女の顔を見る。
氷のような表情が――春の様に、と言うのは言い過ぎだけど、柔和になって、どこか自嘲するように笑みを浮かべていた。
「つまり、意味の無いものに自分で意味を『持たせる』のが人生だ。良いものにするのも悪いものにするのも自分次第。だけど、その意味を誰かに強制するような態度は頂けないよね」
さて、と手元の手帳が音を立てて閉じる。
「じっくり探りを入れていこうと思っていたんだけど、殊の外早急に話が進んだね。いや助かるよ。それでは」
彼女の言葉は、声質は冷たいが配慮に満ちていて、話し方がいかにも人間的に語りかけるようで、とても聞き取りやすい。
けれど、その時。
僕は決して逃れらない魔力を――彼女の口から紡ぎ出される言霊の羅列に感じていた。
「カウンセリングを、始めようか」

死にたがりの声―2

「まず、会話していて気付いたことが二つほどある」
じっ、と覗き込むような視線ではなく、ソファに身体を預けて部屋の装飾を眺めながら、横目で流すように僕の方へ気を向けている。
僕としても、その方が都合が良かった。執拗に見られたりするのは苦手だし、あまり丁寧な態度を取られると遣えるわけのない気を遣わなければならないと思って、余計な失敗を重ねてしまう。
そして自己嫌悪に陥る。
一度も会ったことが無いのに、長年の付き合いがある人ですら取ってくれない対応を、彼女は自然に行ってしまった。
対する僕は、柄にもない演説を繰り広げた反動で冷や汗をかきつつ、顔を俯けてテーブルの上に乗ったコップを見るようにしていた。
「一つはね。私は、特にキミの価値観を『否定』したわけではないんだよ。ただ不都合な考え方だと言っただけで、むしろそっちの方が真理に近いとは思っている。けれどキミは過剰に反応し、結構な弁舌を振るって自分の正しさを主張したね。挙句に自分でそんな自分を悲しいと言った。それはつまり、私の言ったことを、内心では自覚しているとみても良いのかな？」
「それは……」
そうだ。彼女の言う通りだ。さっき彼女が言っていたことはまさしくそれだけで、それが僕の中の何かに『勝手に』触れて、慣れない口を必死に動かした。
だから僕はすいません、と謝った。単純な会話のやり取りすら満足に行えない。
「多分、そうです。僕は間違ってないけど、この考え方しかできない自分が嫌になっています。もっと単純に生きられたら、と何度も考えました」
うん、と一度頷いてから、それでは二つ目だと切り出す。

「キミにはどうも二つの面……おそらく、人付き合いを苦手とする自分を駄目な存在だと思い込み、必要以上に責める自虐的な面と、自分を取り巻く全てを根源的には意味の無いものだと認識し、それに纏わる責任を破棄して当然だと考える、開き直った面がある。違うかな？」

「違いません。ついでに言うなら、自分がどんなきっかけで変わるのかも分からないんです」

「それは多分、キミが思っているより単純なことだよ」

僕は、はっとして顔を上げた。彼女はやはり最初は視線を適当に泳がせていたが。

やがてゆっくりと首を動かして、焦点を僕に合わせた。

僕は、彼女の瞳と正面から向かい合った。

「キミの片一方の面が象徴する、自虐という行為にはストレスが付き物だ。勿論好きでやってるわけじゃないのだからね。当然、いずれ限界を迎える。だけど周囲の人間にはそれが分からない。嫌なら止めればいいと思われてしまうだけで、そこまで想像力が回らないんだ。それがまた余計にストレスを溜める。その内に心は破裂しそうになり、自衛のために自らを破滅的な思考に委ねてしまう」

「……！」

「こんな感じかな。どうだろう？」

言われてみれば、確かに単純なことだ。思い当たることもある。納得するまで深く考える必要もなかった。

先程の場合は、『一度聞いたはずの内容を繰り返させてしまった』ということが負荷となったのだと思う。

ならばどうして、僕は今までそんなことに気付かなかったのだろう――と、気付けば再び自虐を始めている僕を、彼女がしなやかな腕を伸ばして制した。

「カウンセリングなんて言ったが、専門の精神科医では無いからあまり強く断言はできない。けど多分、キミはその掬っても掬っても終わらない泥沼のような思考を繰り返す内に心の病気を患ってしま

ったのだと思う。承知しているだろうけど、具体化できないからと言って馬鹿にしてはいけないよ。病気は脳の異常だし、異常は脳の活動を衰えさせて判断力を鈍くする。以前まで出来ていたことが出来なくなったとしても、それを嘆くのは極力防いで、そして可能な限り速やかに、病院に行くことだね」

――理屈では、分かる。

そもそも反省もなく次に活かそうと意欲も無い、まるで傍から見たら被虐欲を発露しているだけのような自虐など、行う意味など全くないのだ。

そんなことは言われなくても再三分かっていることなのだが――。

「それが出来ないから、病気なんだ」

僕の心を読んだかのような発言だった。

「だけど私の経験による見立てでは、キミはまだ軽傷の部類に入るよ。会話も充分なレベルで熟せているし、元々頭は良いのだろう。その気になれば回復は早いのだと思うけど……」

「すいません」

彼女が、ん、と何かを続けようとしていた口を結んだ。一丁前に意思疎通が果たせているような気になり、僕は素直に続けることができた。

「経験、と仰られていますけど、これまでにも僕みたいな人と会ったことが……」

言葉を受けた彼女は、真面目な顔付きになって。

「あるよ。それなりにね。みんな救ってきたさ」

そう答えた。

――とても、今更な疑問なのだけれど。

というより、既に一度生半可な気持ちで切り捨ててしまった疑念なのだけれど。

この人は一体、何者なんだろう？

僕は全ての患者を救ってきたと言い切った、得体の知れない存在を目の前にしているという恐怖にようやく自覚的になって、その想

いは僅かな攻撃性を伴って言葉となった。
「みんな……って、だって、そんなことが出来るんですか？　たかが一人の人間に」
幾らなんでも、それは大言壮語というものではないだろうか。
心に不安を抱えて満足に日常生活を送れなくなってしまった人は、表層的な症状こそ似ているかもしれないが、それこそ環境も、事情も千差万別のはずだ。
普通に考えればケアの方法だってその数だけ必要になってくるだろう。その全てを把握し、実行するだけの力が、この華奢な一人の女性にあるとでも言うのだろうか。
彼女は彫刻のような顔を崩して、口元に笑みを浮かべた。
「適当な質問を考えてくれていいよ」
「へ？」
「問題みたいな形式がいい。それを、私に尋ねてみてくれ」
「そ、それじゃあ清教徒革命は一体何年に行われたか、とか」
「あら、そんなに簡単な内容でいいのかい？　１６４１年に始まって１６４９年に幕を閉じたね」
意図が分からないまま、取りあえず脳裏に浮かんだものを律儀に口に出していく。
「日本国憲法第二十三条の内容は？」
「学問の自由は、これを保証する。だ」
言って、ふむ、と彼女は自分の顎に手を当てながら。
「そうだな。確かにキミのような状況の人間なら、言われたところで大学受験程度の知識しか思い浮かばないだろう。だったらこう、サブカルチャーなものでもいい。たとえば何々というアニメの第何話のあらすじがどうだった、とかね」
「ええ……」
そんなもの――こっちが覚えてない。と言うより、知らない。検証のしようがない。
仕方がないので、幼少の頃の記憶を辿る。頭に靄がかかったよう

になってすんなりとはいかなかったが、当時欠かさず見ていたとあるアニメの1シーンを思い出した。
「じゃあ、爆撃魔人ダンダークの第三十九話のあらすじを言えますか？」
そう言うと、彼女は顎を抑えながら少しばかり考えて。
「四幹部の一人ヨハネを苦戦の末撃退したかのように思われたジェニス達だったが、ヨハネが死に際に放った光によってルーン王女が敵の基地に連れ去られてしまう。一方基地では、刻一刻と迫るダンダーク復活の時を前に四幹部の一人セレナードが怪しげな行動を取り……？　果たして、セレナードの目的とは何なのか。そして、ジェニス達はルーン王女を敵の基地から取り返すことが出来るのか！？」
少しばかりの感情を込めながら、一息に言い切って、こんな感じかな、とまた笑った。
「多分、一言一句間違えてないよ。確認してみるかい」
「い、いや……」
呆気に取られた。詳しい文章がどうだったかなどは記憶の彼方だが、覚えているシーンがある。
セレナードは王女を脱出させようとして彼女の身代わりとなり、大勢の仲間に背後から何本も何本も槍を刺されて殺されるのだ。
あの残酷な描写は、子供ながらの純真に強く響いた。
だから多分、そのあらすじは合っている。
「私は、神様になりたかったんだね」
「は？」
また唐突な、それでいて余りにも非常識な、そんな発言だったので思わず耳を疑った。
「もちろん、私は人だ。ちっぽけな人間だ。だから空は飛べないし、手から炎を出したりとか、そういう奇跡は起こせない。けれど……」
ちょっと失礼するよ、と来客用のコップに口をつけた。
「この世で起こっていること、記録されていることを知って、覚え

ることは出来る。せめて人に残された可能性を……全ての知識を身につけて、それで誰かを助けることができたらなと考えたんだよ」
口調は、さっきまでのと何ら変わりのない、冷たい声質に余裕のある態度。
しかしその口から紡がれる内容は、あまりにも突飛な、現実感の薄い――異次元の言葉のようだった。
「だから努力した。今ので、実力の程は分かってもらえたかな？ 他にも聞きたいことがあるなら……」
「い、いや。もう大丈夫です」
「そう。私は出来る限りの知識を尽くして物事にあたってきたんだ。まだまだ覚えきれてないことは数え切れないくらいあるけど、今までの彼ら彼女らは、当時の私の力で何とか助けてあげることができた、と思う」
連絡を取るようにしてるけど、分からないことはあるからね、と弱弱しい笑みを作る。
「キミは、そんな人間は存在し得ないと思うかい？ 自分には決して到達できない道だと。それでもいいよ。そういう人の無念を晴らしてあげるために、私がそれを引き受け、それなりの年月を重ねて、この道を選んだのだからね」
さて、と、突然の告白に未だ地に足が着いていない僕を引っ張るかのように話題を変えた。
「まぁ、そんな身の上話はどうだっていいんだよ。何となく凄い、と思ってくれたならそれで良いんだ。私の仕事は、実はと言えばそれだけなんだ。私がキミの気持ちを理解していることを分かってもらって、少しばかりの尊敬なりをしてもらえたなら、それでね」
だってそうだろ、と僕が口を挟む間もなく続ける。
「単純な精神医学の問題だったら、その道のプロがいくらでもいるさ。覚えることだけが取り柄の素人がでしゃばる必要なんて無い。問題は、キミのような人間が抱えている問題が、懇切丁寧なカウンセリングや適切な薬だけでは解消しきれないというところにある」

「それって……」
至極簡単な話さ、とガラス細工のように綺麗な容貌の女性は言った。
「キミは、健康な身体に戻ったとして、じゃあ他人を傷つけることに躊躇が無い下らない人間がひしめくこの社会に飛び込もうなんて、思うのかい？」

死にたがりの声―3

思わない――と、即答しそうになる。けれど、僕はそこで一度踏み止まった。

考えてみる。たとえば先に述べたような社会に対する、人間に対する不信を抱くことそれ自体が病気なのだとしたら。

そもそもが現行する仕組みに馴染めない存在を病気という枠に押し込むために、その言葉が定義されているのだとしたら。

僕の身体が『健全な状態』とやらに戻ってしまえば、今みたいな社会に害を為すような発想そのものが、消えてしまうのではないか。

鬱屈としていた過去のことなどすっぱり忘れ、もしくは夢のように実感の薄いものと化し、忌避していた筈の流れの中へと知らず知らずの内に引き込まれてしまうのではないか――。

だとしたら、はっきりと答えることなど出来ない。

自分が今の自分じゃなくなることなんて、想像することも出来ない――。

「そうやって自分の内面を意欲的に掘り下げようとする態度は、感心できるけどね」

気付けば思考が止まらなくなっていた僕は、彼女の声に引き戻される。

道端で転んだ子供を眺める時のような、慈愛と憐憫のない交ぜになったような表情をしていた。

「これは、そんなに難しく考えることじゃ無い。もし仮に、世間でいわゆる健康と呼ばれている状態が、社会の歪みに無頓着でひたすら経済を回す機械の様になるということを指すなら、私はわざわざ今みたいなことを尋ねたりはしないよ」

キミはどうやら、一度深みにはまると周りが見えなくなるみたいだね、と今まで一番優しい顔をする。

僕は複数の意味で、やっぱり、赤面した。

だから病気が治って、頭がすっきりして、且つ今みたいな思いが胸の中に残ってたら、の話さ。と、彼女は丁寧に補足した。
そういうことなら――。
「思いません……ね。多分」
「だろうね」
思わない。人の不幸を喜び、そしてそれを本能の所為だと諦めているのか開き直っているのか判然としない曖昧な態度で肯定し、自らの小さな誇りを守るためなら平気で他人を馬鹿にする、そんな群れの中で生きていこうとは思わない。
病が完治し、自虐癖が無くなり、辛い思いをする機会がほぼ全て失われたとしても。
――そうなんだ。
そういうことだったんだ。
僕はようやく気付いた。自分の常の、一見何処かに向けて進んでいるようでいて、その実がむしゃらに空を掻いているだけだった思索が、久しぶりに実を結んだ。
僕が幾ら万全の体調を保っていたとしても。
――この世には、それを置いておくだけの居場所がない。
そして、それは。
「悲しい、ですね。悲しいことなんです」
「その通りだ」
けどね、と彼女はそこで少しソファに沈めていた身を乗り出した。
「じゃあ動かない、というわけにもいかないんだ。キミがもし、死というものを恐れているのならね」
「死にたくないなら……」
「死ぬのは、誰だって怖いよ」
その一言は、確実に僕の無駄な部分の思考に費やすための労力を省いてくれたと思う。
こんな世界で生きていたくはない――けれど、死んでしまうのも厭だ。

僕は自分がどっちつかずで中途半端な立ち位置でいることをすぐに、素直に認めることが出来た。
「でもそれは、どちらも本心だろう？　決して共存は出来ないけど、それでも同等の価値を持っているキミの願望だ。そして……」
「あなたはそれを、どうやって解決するんですか？」
その時、僕は彼女と出会って以来初めて、それは極僅かなものだったけど、機械のように冷たい印象の顔から表現された驚きという感情を見た。
彼女のことだから、話の流れを推測されたことに対するものではないだろう。愚鈍な反応しか出来ない僕ですら予想可能だったことだからだ。
それとも、僕がそれをしたということの方に驚いたのだろうか。致し方ないこととは言え、僕はそこまで間抜けに映っていたのだろうか。
本心は分からない。とにかく――。
やっぱり彼女は、次に笑った。
「世界の方をね、新しく作るんだ」
さっき、神様になりたかったって言っただろう、と言う。
確かに言っていた。だからこんな突拍子のないセリフでも、今度は吸収するのに時間が要らなかった。
「キミは最近、夜になっても眠れなかったり、何の前触れもなく泣きたくなったりすることはないかい？」
「ありますよ。布団に入ってからも一時間くらいは寝れません」
「幻聴などもあるだろう」
「時計の針が進む音がやたらと大きく聞こえたり、遠くの駅を走っている筈の電車の通る音が延々と続いたり」
「昼間聴いていた音楽が頭の中で止めようとしても鳴り止まなかったり、視界に入る全てのものが無性に汚らしく見えたりね。私にもそういう経験はあった。だから」
分かるよ――と言った声が一層儚げに聞こえた。

「どうしようもなく辛かった。悩みに悩んで死にたくなることも多々あった。けれど、私は小賢しかったんだね。なら何をしたらいいのか、原因をどうすれば取り除けるのか、自分の望みは何なのか……苦悩を重ねる一方で、そんなことを考える余裕も持っていた」
「じゃあ、それで解決したんですか？」
いや、と首を小さく横に振る。
「足りないものを認識した。何を欲しているかも自覚した。でもそれは、どんな手を講じたところで絶対に得られないものだということも、小賢しい私は同時に理解したのさ」
「それが……」
僕は答えを知っていた。
「神様だったんですね」
「そう。まぁ、そこまで大仰な存在じゃなくても良かったんだけどね。ただちょっと、自分のことを分かってくれて、加えてこっちからも尊敬できるような、そんな人物が居てくれたらと思った。安心したかったんだよ」
「それで、自分が？」
「無ければ作れ、の発想だね。当時の私の傍にそういう人が居たら、きっと少しは楽だったろうから。同じような目に遭っている人には、なるべく手を差し伸べてあげたいと」
そう思ったからこその、今の立場さ、と結んだ。
聞いていて、何故だか胸が苦しくなった。
「はっきり言うとね、キミの瞳に映るこの世界の実態は、大体その見立て通りのものと思って良い。だけど、いくらそれを厭うて憎んで憤慨しても、自分の存在を切り離すことは出来ない。キミだって、寛大なご両親が養ってくれていなければ今みたいに話すことも不可能だったわけだ。両親という世界との接続があってこそ、キミは生存を許されている」
返す言葉もない。やるやらない以前に、僕には一人で生きていく力など備わっていない。それくらいは自覚している。

「だから生きていくためにはどうしても関わりを持たなくちゃいけない。そこで私は、キミに新しい世界――『帰る場所』を提供する」
「帰る場所？」
どういう意味だろう。
「私が悟ったのはね、結局、人は誰かとの繋がりが無ければ生きられないということなんだ。キミが絶望する要因を詳しく見ていけば、恐らく世間で暮らす人との価値観の相互不理解にぶつかるのではないかな。孤独というものは、場合に拠っては死と同じレベルで辛い」
ネットも上手く活用出来ていなかったようだしね、と悪戯っぽく言う。
何も言えない。
「先に言ったね。私はこれまで何人もキミのような問題を抱えた人と話してきた。その全員と今でも連絡を取るようにしている。ゆえに、彼らを紹介すればキミと気が合う人もそれなりに現れるのではないかと踏んでいる」
社会の腐った荒波に揉まれたら、そこで傷を癒せばいい、と余裕を含めて言った。
「私も居る。出来ることなら何でも相談に乗るよ。もし上手くいかなかったら、また別の方法を模索していこう。そしていずれキミにも余裕が出来たら、もう一度外に目を向けるといい。もしかしたら、そこでも良い出会いが待っているかもしれないからね」
最後にどうかな？　と言って、場には少しの間沈黙が流れた。
僕は決め兼ねている。この際、彼女の口から紡がれた説明を疑うことは止めにする。
聞いていて、僕にしてはあっさりと内容を理解して――なんだか宗教みたいだな、と思ったりした。
でも、それは大した問題ではなかった。宗教とは元々困っている人の心の拠り所になるためのものだし、世の中に蔓延している偏見は、現在の団体の多くが手段と目的を逆転させてしまい、それこそ強引な価値観の押し付けを図ってくるからだ。

その点で言えば、彼女の提案はとても真っ当なもので、疑う必要性などはどこにも無いのだけれど。
――問題は。
僕の臆病さと卑屈さ。漫然とした退屈よりも、住み慣れた環境が変化することの方を余程嫌がる、怖がりの怠惰性だった。
「まだちょっと、決心がつかないです」
気持ち目を伏せながら、そう返答した。
対する彼女は、それでもどこか納得した様子だった。
「うん。まだキミは若いから、少しの間ゆっくりと考えればいい。じゃあとりあえず、携帯番号だけは交換しておこうか」
細い指がポケットに伸びて、それらしき数字が羅列したメモを僕に渡した。
僕は慌てながら携帯を取り出して、ぎこちない操作で電話をかけた。
「では、この辺で失礼しようかな。ああ、最後にもう一度言っておくけど、病院にはなるべく早く行くようにね」
「あ、あの……！」
彼女が退室の意を告げ、ソファから立ち上がった時になって、僕は初めてその事実に気付いた。
いや、事実に気付いたというよりも、それを特に気に留めていなかった自分のおかしさを自覚した。
――僕は、彼女の名前をまだ知らないのだ。
でもそれ以前に、どうして彼女が名乗らなかったのかという疑問がある。
事務所の名前なら口にしていた――なら、天宮というのが彼女の苗字か？
どうしてそんな、微妙な真似をするのだろう。
「名前、教えてもらってもいいですか？」
「ん？」
そこで彼女は――なぜだか、彼女の方が疑問符を浮かべて、腑に

落ちないという顔をしている。
何かが噛み合っていない。
「外で会った時に、名刺を渡してなかったかな？」
「えっ」
僕は虚を突かれて一瞬硬直した後、手だけを動かしてポケットをまさぐった。
紙の感触がある。それを引っ張りだす。
そこには――。
「もちろん」
「天宮スミレ、さん」
「偽名さ」
「はぁ」
「諸事情が色々とね。悪いけど、ちょっとそこは答えられないんだ」
ごめんね、と言いながら玄関へ向かう。送るために僕もついていく。
「あの、料金は」
「ん？　あぁ、また今度でいいよ」
「そ、そんな感じで成り立つんですか？」
「ははっ。キミはまず自分のことを顧みなよ。私のことは、心配しなくても平気さ」
お茶をごちそうさま、病院には行きなよ、と最後にもう一回念を押して、天宮さんは扉の向こうに消えた。
――考えてみれば。
あの人はどうやって、僕の存在を探り当てたのだろうか。
それに適応する語句で検索をかけたのだろうか。『鬱』や『死にたい』などという言葉で浮き彫りになるのは、ほぼ平和の群像だけなのだけれど。僕は使わないし。
安易に連絡先の交換なんてしてしまったけど、果たして本当に大丈夫なのだろうか。聞いたこともない会社から見たこともない桁の額を請求されたりしないだろうか。

探れば探るほど、怪しいことだらけだ。
――まぁ、いいか。
天宮さんの言葉で、僕の中に巣食っていた閉塞感のかなりがほぐれたのも事実だ。
あの話の全てが詐術に基づくものだと言うのなら、それはもういっそ手際を褒めるべきだとまで思う。
帰る場所――新しい世界。
こんな僕を受け入れてくれる人が待ってくれているなんてことが、本当にあるのだろうか。
身体が幾分か、軽くなったような気がする。
そして僕はパソコンの電源を入れて、近在する病院の検索を始めた。

あまのじゃくの歌

空は低くて窮屈だ。鳥はこの小さな箱庭の中で翼を満足に広げることも出来ず、その身をひたすら重力に晒しているだけなのだろう。

海は狭くて不透明だ。人が楽しそうに浸かっている様はまるで池に浮かぶ蛙のようで、上がってくればその身体に纏わりついた無数の濁りが外気に混ざって気味が悪い。

近付いてみれば雪は美しい純白などでなく、多量の塵や埃を内包した灰色の不純物である。

夢というのは基本的に虚しいものだ。もし叶えたとしたら、それが嬉しいと言うなら、叶えた時に喜んだり祝ったりしてくれる周囲の人間がいるからこその幸せなのであって、もし周りにそのような存在がなかったら、夢単体には何の希望も託されてはいなかったことが初めて判る。

孤独に見る夢ほど滑稽なものはない。睡魔が誘う刹那的な幻想の方がまだマシだ。

そして――。

「人生とは、とても楽しいものなのよ」

「何言ってんのよ」

壁際のベッドから覗く、窓越しの夕焼色に染まった空から顔を背け、僅かに目を細めながら儚げな口調で――悟ったような口を利いたあたしの頭を、奥園雪（おくぞのゆき）の持った、高校の校章が刻まれているファイルがその重みに任せて叩いた。

あたしはわざとらしく苦笑しつつ、悪戯っぽい口調で言う。

「ちょっと、病人には優しくしなさいよ」

「あのね……」

雪はあたしが乗っている寝台の傍に設置された机に今のファイルを置きながら、呆れたような視線を向けてきた。

「反論できない冗談には戦隊モノで支給される共通の光線銃くらいの価値もないの。分かる？　あんたの冗談は冗談に聞こえない」
「たとえは意味不明だけど、まぁ言いたいことくらいは」
「結局あいつら、大体の戦闘はそれぞれの固有武器使ってんのよ」
とある病院の個室。今は夕日に照らされて赤く染まっている部屋も、夜になって電気が点いたりそれが明けて外が明るくなったりすれば、床も壁も天井もこれでもかという程潔白な、清潔感を主張する。
薬品みたいなものが混じった無機的な臭いも合わさって、あたしは少し落ち着かなくなる。
でも一方で、それが逆に心地良いと感じたりもする。
病室の雰囲気がではなく、何となくむず痒くなるような自分自身を、まるで他人事のように楽しいと思ってしまう。
あたしは――捻くれているのだ。
「そんな感じで言いたいことも言えなくなったわたしが下手に気を遣って気まずい雰囲気になったらどうすんの。あんたそれでいいの？」
「雪って、面白いね。そういうこと、普通は一々言わないよ」
「そっちが変だから必然的にわたしもこうなるのよ」
あたしが笑うと、雪も静かに口を緩める。
そういう風にあまり大袈裟な仕草を取らなかったり、やたらと偉そうな口ばかり利いたりする態度に反して、雪の顔は齢の割に結構幼いとあたしは思う。
けれど、綺麗に切り揃えられた髪や、その上に飾り付けられた赤いカチューシャと一緒に見てみると、とても可愛らしく映えるのでそれはそれとして良いのだろう。
雪はよくあたしのことを綺麗だと褒めるけど、個人的には雪の方が他人に好かれる顔だろうと思っている。
まぁ、やっぱり外見と内面との差がそれなりにあるので、果たしてその先があるのかどうかは分からないけど。

――あたしはあたしなりに本気で、雪には幸せになって欲しいと思っていた。
「あたしはさぁ」
あたしがおどけた雰囲気を心掛けると、それを受けた雪はかえって真面目な表情を作る。
それなりに付き合いは長いのだ。あたしの表面的な態度が話の深刻さと反比例することを、彼女は承知しているらしい。
それでも、あたしはこの性質を改めるつもりは無いのだけれど。
「今の医学って、もう充分進歩してると思ってたんだ。０か１００か、言っても５０パーセントかくらいの判断は迷わずきっちり出来るくらいにさ。でも……」
雪が顔をしかめる。彼女はそれでも、同情しているわけでも嫌がっているわけでもない。
あたしは昔から彼女と居ると、とても話し易かった。
「２０パーセントって何だか、中途半端だよねぇ」
「……」
でも、あたしは雪に対して上手に気を回すことが出来ない。いつだって、自分が言いたいことを言いたい時に言いたいだけ言って困らせる側だった。
２０パーセントというのは――来週に行われる、あたしの手術の成功確率だ。
あたしは昔から心臓に病を抱えていた。それでも最近までは薬を飲みながら病院にも頻繁に行きながら誤魔化して、学校にも通って日常生活を送っていたのだけど、遂に来るべき時が来たということらしい。
けれど、発作がある時とない時では随分と体調に落差がある。未だに少し、実感が沸いていないという側面もある。
こういう境遇の時、世間では具体的な数字を患者に知らせない場合もあるらしいけど、捻くれた性質のあたしはどうしてもそれを聞きたくて、そんなあたしを理解している雪の重い口から半ば無理矢

理に聞き出した。
どうして雪が知っていたのかと言えば――多分、母がそのまま教えたのだと思う。
母はあたしが小さい頃に配偶者である父を亡くして、以来女手一つで病弱なあたしを育ててきた。
その疲弊していただろう母が――ひょっとしたらずっと前から知っていたのかもしれない――絶望的と言うに充分相応しい数字を聞けば、誰にも打ち明けずに一人で抱え込めるとは、あたしには思えない。
雪ならば信頼できると判断したのか、だとしたら結局それは裏切られてしまうわけだけど、きっと、そのような事情だろう。
勿論、あたしが聞いたことを後悔しているなどということはない。雪にもそう言ったし、彼女ならそれに余計な解釈を加えることもないだろう。
でも、だからと言って、いくら当事者だとしても、自分からこんな話題を振ってしまうのは些か良くないことかもしれないと、少し後ろめたい気持ちになる。
口を止めることは、出来ないのだけれど。
「死ぬの確定、ってなるよりは随分マシだけどさ」
「そう考えるのが、一番いいんじゃない」
入院したての頃は持ってきたファイルを一々指差して、授業に遅れないように目だけでも通しておきなさい、と本当の母のような口を利いていたけど、最近ではあまり言わなくなってしまった。
あたしはそれが少し寂しい。死は逃れられないと認識させられているようで――ではなく、彼女のあの口振りが嫌いではなかったからだ。
自分で切り出しておいて無責任だけど、これ以上広げても仕方のない話題なので、少しばかりお互いに口を閉じていた。
やがて、雪が唐突なことを言い出した。
「わたしに、何か出来ることある？」

「え？　いや、もう既に色々と世話焼いてもらってると思うけど」
「そうじゃなくてさ、何かこう……なんて言えばいいのかな」
あたしは、雪が言いたがっている内容を察した。
「死に行く前に最後の願いを、みたいな？」
「なんでこっちが一生懸命言葉を選んでるのにそういうこと言っちゃうのよ」
「本当に気を揉んでいたのならその反応はおかしい」
「どうせ気にしないくせに」
「傷付くなぁ」
あたしはもう一度笑って、雪の目を見る。
「その通りだけどね」
「それで、何かないの？」
尋ね方がぞんざいになった気がする。他にすることも無いので、あたしはようやく答えを考える気になった。
「うーん……」
しかし、思った以上に捗らない。内面に潜ってどれだけ探れど、我欲らしいものは見えてこない。
そもそもあたしは子供の頃から、多分病気とは関係なく、諦めの良い方だったというか――物事にそこまで執着するような人間ではなかった。
店を回っていて目に付いたものがあっても駄目と言われればすぐ手を引っ込めたし、休み時間に心の限り動き回る同級生を見ていても羨ましいとは思わなかった。
何と言えば良いのだろうか、結局、大抵のことは無ければ無いでどうにかなるものだと、子供ながらに達観した面があったのだと思う。
必要なものだったら手に入っているはずである、手元にあるもので出来る範囲で動けば良いのだと、半ば運命論のようなものに思考を委ねていたのだろう。
そんな調子でここまで来てしまったものだから――。

「自分で自分の欲のなさにびっくりしてる。聖人かもしれないあたし」
「駄目。何か言いなさい」
「そんなこと言われてもなぁ……」
どれだけ考えを巡らせても一向にそれらしい意見が浮かんでこない。総理大臣になりたいとか、そういう突拍子もない下らない子供の卒園アルバムみたいな発想しか出てこない。
捻くれたあたしの脳は、こういう真っ当な質問で来られると弱い。見るに見兼ねたのか、しばらくして遂に雪がもういいわよ――と口に出した時。
稲妻のように閃きが生まれた。ここまでくると呆れてしまう。
「歌」
「うた？」
「子供の頃にね、何かで聴いて、なぜか気になってた歌があるの。それをもう一度聴きたい」
「持ってないの？」
「ちっちゃい時の話だって。自分で調べる方法なんて知らないし。多分、それっきり」
「曲名は？」
「わからない」
「歌手は？」
「わからない」
「困ってしまうわ」
鳴く？　と聞くと、そんなわけないでしょと返ってきた。
「じゃあせめて、どんな感じの曲だったのか教えて」
「再現するの？　難しいと思うけど」
何せ、本当に遠い、油断すると霞んで消えてしまいそうな記憶だ。
あたしが宙吊りになったようにおぼろげな旋律をハミングで奏でると、雪はやっぱり苦いものを噛んだような顔をした。
「本当に、そんな感じなのね？」

「わからなーい」
けたけたと笑うあたしの顔を、ため息交じりに眺めたかと思うと、雪は静かに置いていた鞄を肩にかけた。
「帰るの？」
「大仕事になりそうだから」
「ごめんね。部活だってあるのに」
「別にいいわよ」
あんたとわたしの仲でしょ――と、最後に恰好つけたセリフを残して雪は病室を出ていった。
「……ふぅ」
一気に閑寂として、徐々に薄暗くなる病室を意味もなく眺めまわすと、あたしは横のファイルに手を伸ばす。
――本当は、そこまで気にしていたわけでもなかったんだけど。付け焼刃みたいな希望だったけど。
でも、手に入るかもと思ったら本当に聴きたくなってくるから不思議だ。あたしらしくない。
なら、騙したことにはならないだろう。砂漠のような環境で探し物をするはめになった雪だって怒りはしないだろう、と誰に対するわけでもない弁解をして。
あたしはファイルを開き、中のプリントを読み始めた。

あまのじゃくの歌―2

日付が変わって、回診にきた看護師さんと身体の調子を確かめたあたしは、自分でも少し積極的に動いてみようという気になった。

歌の中身が知りたい――どうせこのまま来週まで待っていたって、などという後ろ向きな理由ではあたしの原動力にはならない。

なぜならあたしは、捻くれ者だからだ。

退室の旨を看護師さんに伝えて、塵一つ無いほど綺麗に磨かれた光沢のある廊下を進む。

最初は外で聞き込みをしようと思った。人が集まるところならロビーなどでも構わないのだけど、室内では音が跳ね返るし、何かと注目を浴びやすい。

自分で言うのも何だけど、元々人見知りするようなタイプではないし、一々そのようなことを気にするのは馬鹿らしいのかもしれない。

でもそうしないのは多分、外の空気に飢えていたのだろう。天気は快晴だ。加えてこの病院には、少し洒落た庭があるのだ。

エレベーターに乗り込んで、一階のボタンを押す。

先程とは別の看護師さんと乗り合わせたので、同じように訊いてみた。

「あの、すいません」

「あ、はい、なんでしょうか」

もはや言い慣れた感じさえある事務的な口調だった。あたしはそこで、今から自分のする質問の馬鹿馬鹿しさを再認識して、思わず苦笑しそうになる。

歪みそうになる口を意識して抑えながら、こんな感じの歌を知りませんか、と昨日のように奏でてみた。

看護師さんは数秒の間、呆気に取られた表情をしてから、ごめんなさいね知らないわと幾分か砕けた口調で答えてくれた。

そうですよねありがとうございますとあたしもお礼を言って、エレベーターを出て看護師さんと逆方向に廊下を歩く。

――どうでもいい話だけど。

本当に、どうでもいい話だけど。

自称誰とでも仲良くなれる――人見知りしないと公言する人間は、多く下品で下世話な話を好む傾向にあると思う。

とりあえずその手の話を臆面もなく喋ることによって、自分には裏表が無く付き合い易い人間なのだというアピールでもしているつもりなのだろうか。

だったらそれは、逆効果になる場合がある。と、言うよりも――。

そんなやり方で意思疎通を図れるのは、相手の性格も似たり寄ったりだった時に限ると思う。

決して、無暗矢鱈に本音を打ち明ければ良いというものではないとか、隠しておいた方が良いことも世の中にはあるとか、そういうことを言いたいわけではない。

何と言うか――そのスタンスは人としての思考を放棄している感じがして、みっともないのだ。

要は、公の場でそういう話をするということは、喋っている内容と現場の雰囲気の間に落差を生じさせようとする試みだろう。感情の起伏は環境の落差に大きく影響される。こんな場所でそんなことを、と誰もが思えば場は盛り上がる。

けれど、それは結局数ある会話手法の中で最も手軽なものでしかなく、深い知識や奇抜な発想も持たず、所詮それでしか周囲を沸かせることが出来ない人間の程度など、知れているものだと思う。

一定の器量や見識を持った者ならば、目前に展開される漫然とした流れの中から見落としがちな『何か』――矛盾だったり誤解だったり――を拾い上げて、その複雑な構造を紐解くような形で聞く側の知性にも訴えかけるような笑いを誘う。

もしくは聴衆を丸ごと自分の創造したステージ――物語や、雰囲気などといったものに引き込み、それそのものの魅力で惹きつける

か、最後は一気に卓袱台をひっくり返すかのような真似をして、その急転直下の速度や突然の喪失感と共に、暫くは決して消えないだろう衝撃を残す。
人らしい品格もなく、我々に与えられた知能という名の特権も満足に扱えず、考えを練ることも止めたその場限りの軽薄な態度などでは、その輪の中だけでの付き合いなら足りるだろうが、一歩外に出れば誰にも相手にされなくなる。
彼らはしかもそれを相手の乗りが悪い所為だと思い込んでしまうからタチが悪い。人見知りしないというのは多くの場合、ただの厚顔無恥だ。
当然、全てを一括りにして言えるとは思ってないけれど、あたしのまだ二十にも満たない貧しい人生経験からすれば、そう大きく外れているわけでもないと思う。
だからあたしは――。
人見知りはしないけど、友達もそこまで多くない。
「……」
中庭の入口に辿り着く。手動の扉を前に押して外に出る。
ここの病院の中庭は、もはや簡単な自然公園を名乗っても良いくらいの規模を持っていると個人的に睨んでいる。
石のブロックで出来た道を少し歩くと、多くの木々がまるで本当の森のように鬱蒼と茂っている空間の中へと誘われる。
そこからまた少し進むと天井が開けた場所に出て、そこには大きな噴水が一つ、森に囲まれるようにして、アーチだったり滝だったり様々な形を水で象りながら訪問者を迎えてくれるのだ。
それはまるで森の静謐に水の耽美が見守られているかのようで、偶に噴水に虹が掛かっていたりすると、もう神秘性が極まっていっそ自分が聖域に立っているかのような錯覚に陥る。
――などと、芸術家めいた評論をしてみても、どことなくちぐはぐな感じだ。
自分にそういう、いわゆる美的な感受性とやらが備わっていない

ことは自覚している。
だからきっと、昨日雪に話した歌もそこまで大仰な内容でもないのだろう。子供の耳に心地よかった程度の、凡庸な曲なのかもしれない。
それでもあたしは今、ある程度真剣にその歌を聴こうと思っている。理由など考える気にもならない。そう思うからそう思っている。
人は少ない。それに老人が多い。拙い感覚で言わせてもらえばこういう天気にこそもってこいの空間だと思うのだけれど、意外と世間には出不精の傾向があるらしい。
若い人を見つけた。耳にイヤホンをさしながらベンチに腰かけて噴水を眺めている。あたしには躊躇が無い。
近付いて、声をかけた。
「あの、すいません」
しかし、全く反応がない。依然、表情一つ変えずに噴水を見ていた。
「すいませーん」
「えっ？　あ、は、はい」
二度目の呼び掛けで気付いた時、やけに慌てふためいた仕草で会釈すると、素早く外そうとしたイヤホンが手から滑って落ちてしまった。
男の人だ。多分年齢はあたしとそう変わらない。目にかかりそうなくらい伸ばした前髪から、大人しそうな印象を受ける。
彼はすぐにイヤホンを拾い上げ、丁寧に音楽機器の電源まで切ると、こちらへ伏し目がちに気を向けた。
「えっと、僕になにか用ですか？」
「はい、あの……」
自分だけ立っているのも妙な気がしたので、もう一度すいませんと断って、あたしは彼の隣に座る。彼は僅かに身体の位置をずらして空きを作ってくれた。
「歌を探しているんです」

「はぁ」
「こんな感じの歌なんですけど」
これで通算三度目のハミングだ。最初の時と微妙に音程が違っている気がしなくもない。
彼がやけに真面目な顔をしているので少し気恥ずかしくなる。人に聴かせられるだけの完成度があるはずもない。
「知りませんか？」
「そうですね……」
どうやら真剣に考えてくれているようだ。少しだけ胸に期待が膨らむ。
けれど一方で、そう都合良くいくものかと答えを聞く前から既に断じてしまっている側面もある。
案の定、少しして彼の口からごめんなさいと言葉が漏れた。
「聞き覚えは無いと思います。お役に立てず、申し訳ありません」
「そうですか……」
そんなに馬鹿丁寧に対応しなくても、と頭を下げた彼を見ながら他人事のように思う。
むしろこの雰囲気にすっかり浸っていた彼の邪魔をしたのはあたしの方なのだし、片手で払われることはあるとしても、ここまで真摯な態度を取られるとは予想外だ。
こちらこそお邪魔してすいませんでした、と、別の人にあたろうと立ち上がったあたしの耳に。
「あの、どうしてその歌を？」
彼の声が伝わって、動きを止めた。
振り返って彼の顔を見る。少しだけ目が合ったけど、すぐに逸らされてしまった。
「聞きたいですか？」
「い、いや、ご迷惑ならそんな……」
無駄である。今の聞き返しには何の意図も託されていない。
ただなんとなくそうしたい気持ちになったのだ。なぜだろう。

「あたし、来週には死ぬかもしれないの」
おそらく同年代か、年下だろうと判断して敬語をやめてみた。
案の定、彼は不愉快な素振りなど見せず――というより、急な告白に戸惑って気にする暇もないようだった。
当たり前だろう。
「あたし、立花茜（たちばなあかね）って言います」
「あ、僕は……」
そこで彼は一度息を呑んでから。
「僕は、氷山……です」
「氷山くんは、なんでここに居るの？　怪我？」
「まぁ、その」
少し言い難そうに。
「鬱の治療、と言いますか」
「鬱かぁ」
よく耳にはするけど、その実態についてはほとんど無学に等しい。ただ、下手な言葉は掛けない方が良いということくらいは知っていた。
でも、治療中だということだし、会話も普通にこなせるようだし、そもそも呼び止めたのは彼の方だし、普通の人と接する時と同じ程度の礼儀を心掛けていれば良いのではないかと、どこか楽観的な考えが浮かぶ。
とりあえず不快な思いをしたら教えて欲しいと言って、話を続けることにした。
全くもって、気が回らない。
「もうカウンセリングは終わってこれから薬を貰いに行くんですけど、どうせなら一度この庭に来てみようかと思いまして」
「ね。いいよねここ」
ですね――と、どこか照れ臭そうに笑った。
しかし、その表情は間を置かずして変化する。一転して神妙そうにあたしの方を見ると、気まずい様子で口を開いた。

「それで、さっきのは……」
「ああ、死ぬかもっていう話？　いや、絶対ってわけじゃないんだけど。五回に一回くらいの確率で成功するらしいから、手術」
「それは……」
氷山くんは後に続く言葉を探しているらしい。
その気持ちは察することが出来る。大変ですね、というのも落ち着かないし、可哀相ですねなどというのは問題外だろう。
あたしとて、逆の立場だったらそれなりに困る。だけど今はそうじゃない。
自分の性格の悪さを内心で自嘲しながら、適当な話で間を繋ごうとした時。
氷山くんが言った。
「頑張ってください」
「え？」
頑張ってください、ともう一度繰り返した。
あたしは――。
笑った。
「あはは。あたしはただ解剖されるだけだって。今のはお医者さんに言うべきだよ」
「でも多分、僕に出来るのはこのくらいなので」
「面白いなぁ」
そして、優しい。
あたしは鬱について何も知らないけど、多分彼のような、繊細な心で他人に気を遣う人ほど罹りやすい病気なのではないかと思う。
下品な人間ほど大手を振って往来を歩くことを知っているからだ。
「ねぇ、ちょっとお願いがあるんだけど」
そんな彼を前にして――あたしは今、もしかしたら母の気分になっているのかもしれない。
誰かに話したい。共感してもらいたい。この胸を覆う靄を少しでも晴らしたい。

けれど、それはとても勝手なことだ。自分の苦しみを、他人に分割して与えることで負担を軽くしようとする行為だ。
だから出来ない。滅多な人には話せない。
雪は、あたしに生きていて欲しいと願っているのだ。
それでも――。
「今から話すこと、聞いてくれるかな？」
彼の頷きは、あたしの中の天邪鬼を完全に解き放った。

あまのじゃくの歌―3

「あたしはさ、正直、もういいかなって思ってるの」
氷山くんは顔を僅かに俯けながら、やっぱり神経を耳に集中させているみたいだった。
さっきから慇懃と言うか誠実と言うか――雪とは違った姿勢だけど、あたしの口は随分と軽くなる。
真っ直ぐに自分と向き合ってくれている感じがして、気後れはするけど、それでも嬉しい。
「お医者さんや看護師さんや家族や友達とかには言ってないんだけどね。みんな心配するだろうから。それなのに、誰かには聞いて欲しくなっちゃうんだよねぇ」
そんな内容を、心を通わせたわけでもない、会って数分も経たない人に打ち明けてしまうのはどうかとも思う。
だけどもういい。もう止まらない。
もはや最初に着想したのがいつの頃だったかも分からない――長い間、考え続けて、抱え込んできたことだ。
「ロールプレイングゲームってあるじゃない？」
「ゲーム、ですか？」
「そうそう。主人公になってレベル上げてお金溜めて武器買って魔王倒して……っていうやつ。最近のは親玉の属性も色々と種類が増えたみたいだけど」
「はぁ」
「そういう気分なんだ」
すると氷山くんは言葉の意味を直ぐに聞き返したりはせずに、一層目を伏せて考え込んでしまった。
尋ねられてから答えようと思っていたあたしはその行動に間を外されて、少しだけ焦りながら話を繋いだ。
「だからその、さ。そういうゲームって、クリアしたら魔王を倒す

前のところでセーブデータが作られるじゃない？　やったこと、あるかな」
「ああ、はい。多分、人並み以上には」
「なら分かり易くていいね。あたしは、実はそこまでじゃないんだけど。とにかく、もし主人公たちが魔王を倒して世界を平和にしたとしても、もう一度電源を点けたらそういうの無かったことになってるわけでしょ。手下もうようよいて、町に住んでる人は怯えてて、一行はいつまでたっても自分の家に帰れないわけ。ねぇ、それってなんでだと思う？」
「うーん……」
今度は、半分わざとだ。質問には真面目に考えて答えを出そうとする、彼の性格を承知した上での言い方だった。
意地悪をしたつもりでは無いのだけれど。ただ、一気に捲し立てるように話を進めるのでは印象が薄い気がして、少し間を取ろうと試みただけなのだけれど。
自分の性質を顧みれば、天然かな、と疑ってしまうところもある。
あたしは続ける。
「その先が用意されていないからだよね」
「それはそうでしょうね」
「取りあえずそれっぽい後日談だけ乗せておいてさ、平和を取り戻した人達の生活とか細かいところは放っておかれる。重要なのは悪行を働く魔王とそれに苦しめられる市民と立ち向かう主人公達の描写だけで、あたしは、本当に大切なのはその後の何でもないような日常の部分だと思うんだけど、そういうのを消してまで戦争の状態に戻すわけ」
「人がゲームに求めているのは非現実性とそれに基づくスリルや快感ですから。それはつまり、役割を終えたということではないんですか？」
「役割を終えた世界は、消されちゃうんだよね。苦行を強いられることでしか存在出来ないから」

「そんな気分だと」
うん、とあたしは微笑んだ。
「厳密に言えば、最後の決戦に臨む前の主人公の気分。どうせ勝っても、消されちゃうんだぁって」
「来週の手術が？」
「なんとなくそんな感じがするの。人ってさ、多分、『ここで死にます』みたいなタイミングが予め決められてるような気がするんだ。死期っていうの？　ゲームで言えばエンディング。それでもし、何らかの不具合が起こってエンディングの先に行けたとしても……」
「そこには、何も無い」
２０パーセントなら充分ラスボスレベルだよねぇ、と笑うあたしの顔を氷山くんは見ようともしなかった。
「頭で理解してはいるんだけどさ。この世はゲームじゃないし。もし生き残れたら、雪もいるし、お母さんもいるし、あたしは健康になるしで、素晴らしき第二の人生？　みたいなのが始まるんだよきっと。でもね……」
どうしてだろう。喉の奥が熱を持ち始めている。
「離れないんだ、この考えが頭からどうしても。これって、諦めてるのかなぁ。八割ならどうせ死ぬと思ってるから、生きてても大したことないって思いたいのかなぁ。だとしたらちょっと」
気付くと、氷山くんが驚いたような視線を向けていた。
「悔しいなぁ」
「あの、これっ……！」
急に慌ただしい仕草を取り出した彼を不思議に思って眺めていると、彼の手に一枚のハンカチが握られていた。
どうやらあたしは、泣いていたらしい。
本当に、もし良かったらでいいですからと必要以上に畏まる彼の手からそれを受け取り、音を立てず頬を伝っていた涙を拭った。
「ごめんなさい、洗って返します」
「い、いや、大丈夫ですから。それより……」

「平気。なんで泣いたのか自分でも分からないくらいだから」
確かに普通の人とは異なった境遇かもしれないけれど、それを悲しんだことなど、おそらくこれまでの人生の中で一度もない。
自分はこのような特徴を与えられてこの世に生み出された、ならばその自分なりの人生を全うしていけば良いのだと思ってきた。
だからこそ、病室で雪と話していて落ち込んだ経験も無かったし、節目となる大手術を目前に控えていてもこのような気楽な行動を取れるのだ。
だからこそ――あたしは今、あたしが分からない。
自分が何をしたところで来るべき時は必ず来るし、成るような結果にしか成らないというのに。
「変だね」
ハンカチを持ったまま、まだ熱の籠った瞳を細めて笑う。
氷山くんは――。
「そうでもないですよ」
と、多分今まで会話していた中で一番、芯の入った声を出した。
「人って、難しいじゃないですか。とりわけ性格なんて、簡単に測れるものではないと思います。過去にこんな事件があったからこうなったとか、普段の自分はこうだからこう考えなければおかしいとか、そんな風に拘る必要なんて無いし、創作物の登場人物でもなければそんな一定の基準に身を完全に任せることは無理です。今の自分の成り立ちには数え切れないほどの過程が含まれているし、つまらないことで転びますよ。大事なのは今の自分であり他人です。だから、そこまで気にしなくても……」
語尾に近付くにつれて音量が弱まっていくのが何だか面白かった。照れ臭そうに、それに――と続ける。
「僕は、何となくだけどその考え方に共感できます」
「え、死期の先のこと？」
「はい。というかきっと、おこがましいですけど共感出来るのは僕くらいじゃないですかね。こんな精神を患った人間に、と思われる

かもしれませんが」
「いや、そんなことないよ」
「そうですか。実は昔、僕も似たような思考に陥ったことがあります。まぁその、よくありがちな、世間の人間は腐っているとかそういうところから端を発して」
「そこまで間違ってないと思う」
「どうなんでしょうか。それで結局、死ぬのも厭で生きているのも厭で……という、半端な生き方をしていたことがあって」
「似てるね、確かに」
「だから、分からなくもないんです。実際本当に死のうとして、少しだけ同じようなことを思ったこともあります。けれど」
こうして生きてますよ、と初めて優しい笑みを浮かべる。
どうして、とあたしは訊く。
「生き方を教えて、居場所を作ってくれた人がいて。よく、神様になりたいと言ってるような人なんですけど」
「宗教？」
「お金は取らないんですけど、似たようなものかもしれないですね。昔の哲学書の中身を分かり易く解説してくれたり、戯曲の一節を空ですぐに言えたり、海外の……しかもあまり有名じゃないバンドの曲を全部言えたり。過去に流行ったアニメの登場人物を全部覚えてたりするんです」
「なんか、いくつか無駄な知識が入ってるような気がするけど」
「僕もそう思いました。知っていても仕方ないんじゃないですかと訊いたら、『神様がそんなことを言うと思うかい？』と返事がきました」
「面白い人だね」
世の中には色んな人が居るものだ。目当ての曲を見つけられなくても、それを再認識できただけ今日という日は有意義だという気にもなる。
その人のおかげで、少しは前向きになれたんですけど――と、そ

こで氷山くんはバツの悪そうな顔をする。
「すいません。これは、そんな話では……」
「……」
確かにそうなのだ。いくら彼が感情の制御が出来なくなっているあたしを諭し、共感して勇気付けてくれたところで、肝心の手術が失敗してしまえば何の意味もない。
あたしは死ぬ。未来は消えて無くなる。
そんな状況に置かれた人物を目の前にして、嬉々として己の復活譚を語るなどという行為は、下手をすればただの嫌味になりかねない。
だけど。
――そんなのは、あたしだって一緒だ。
「いいよ、別に」
氷山くんが、あたしの目を見た。
「その神様にも、お願いしてもらえるように頼んどいてよ。あたしの手術が、成功しますようにって」
氷山くんは少し嬉しそうな顔をして、勿論ですと言ってくれた。
望みなんてほとんど残されていないような数字だけど――。
今なら、むしろ失敗してもあの世で笑っていられるような気がする。
彼の話を聞いていて、そう思った。あの世になら、きっと面白い人がたくさん居るだろうし。
本当の神様にだって、会えるかな。
「じゃあ、そろそろ行くね。ごめんね、長々と付き合わせちゃって」
「あ、あの……！」
立ち上がった後で、振り向いた。向こうも同じように立っていた。
「もし、成功した後で本当に何も無くなってたら、生きていてもしょうがないみたいに考えてしまうことになったら……」
彼は一度そこで、唇を噛みながら息を呑んだ。
「僕が、何とかしますから。あなたが楽しめるように出来ることな

ら何でもしますから。絶対に。だから」
頑張って、成功させてください。
そう言った。
「……頑張るのはさ」
あたしじゃないんだよ、と再び笑おうと思った。
その時だった。
「――っ！」
衝動が、胸の奥から一気に駆け上がってくる。咳が止まらない。
途端に呼吸が出来なくなって、あたしはその場に蹲った。
大丈夫ですか、と最初に会った時のように慌てながら氷山くんが駆け寄ってくる。
暫く周りを見渡したり、手持ち無沙汰におろおろと動き回ると、すいません、誰か、と声を裏返しながら呼び掛けて、この人を診ててあげて下さい、と言うと同時に駆け出そうとする。
――あたしは彼の足を掴み、備えつけてある病院用の簡易携帯電話の赤いボタンを押して手渡した。

「どうして、そういう危ないことをするのよ」
「別に今日のは危なくないよ。危ない時は寝てたって危ないんだから。大体、少しは外の清浄な空気を吸った方が良いんだって」
夕方。いつものように雪が個室を訪れ、資料の詰まったファイルを置いた。
雪は呆れたように大きく溜息を吐く。
「周りに人が居なかったらどうするつもりだったの」
「そういうところには行かないし、そもそも発作が起こったって全く喋れないわけじゃないから」
大丈夫大丈夫、とおどけて見せるあたしに対して、もう何も言うまいといった素振りで雪が鞄の中に手を突っ込んだ。

そこから――携帯型の音楽機器が取り出される。
「適当に見繕ってきたわ」
「凄い。どうやって？」
「今の技術ってやっぱり進んでるのね。鼻歌で知りたい音楽を検索できるサイトがあったの。まぁ、それでも一気に限定できるわけじゃないし、やる度に結果は変わるし、掲示板で情報性の全くない質問を書き込んで訊いてみたりして、何とか絞り込んで」
巻いていたコードをほぐしながら。
「取りあえず、二十曲」
「多いね。それでも全部じゃないんだ。しかも、お金だってかかるでしょ？」
「気にしなくていいわよ。ちゃんと払ってもらうつもりでいるから」
自分でやると言ったのだけれど、まるで子供に接するみたいに雪はあたしの耳にイヤホンを丁寧にさして、機械の操作方法を教えてくれた。
聴いてみなさいと言われて、一曲目を再生する。
すると――。
「あ」
懐かしいような、新鮮なような、それでいて妙に耳に馴染む音楽が。
「これかもしれない」
「嘘」
「ちょっと待って」
二曲目、三曲目と聴き比べてみる。
どうにも、最初の方がしっくりくる気がする。
うん。これはきっと――。
「やったよ雪。あたし、一発で見つけた」
「冗談じゃない。こっちはほぼ徹夜だったのよ。それに……」
雪は、僅かに肩を落としながら。
「こんなところで、貴重な運使ってんじゃないわよ」

と、言った。
「逆だよ」
逆？　と睨むような落ち込んだような視線であたしを見る。
「そう。ツキっていうのは続いていくもの。あたしは今、良い流れに乗ったんだ」
「あら、あんたらしくもない」
あたしはへへ、と子供っぽく笑ってみせる。
なんか雰囲気変わったわね、と言う雪に、あたしは話す。
「今まではさ、手に入らないものは必要じゃないから、欲しがることはないんだと思ってたんだけど」
「うん」
「もしかしたら、そういうのって全部『手に入れちゃいけないもの』だったのかもしれないよね。だって、何かを得ていたらそれに応じて行動だって変わってたはず。行動が変わってたら、会えなかったかもしれない人だって居るもんね」
「何の話？」
「あたしは今、とても前向きだ」
首を曲げて、茜色に染まっていく空を窓から眺める。
空は――。
「雪」
「なによ」
「あたし、絶対手術成功させる。やりたいことが出来たんだ。あたしらしくないことを、あたしらしくやるよ」
空は、やっぱり低くて。
――手を伸ばせば、届いてしまいそうな気がした。

殺し屋の瞳

生まれた時は、心の底から、溢れんばかりの寵愛を捧げていたのだと思う。

だが、憂き世の空気を吸い続ける内に、身体は衰え心は穢れ、俗欲の誘惑にも目を眩まされてしまうほど弱り果ててしまったのだろう。

自分を売った両親を責めるつもりはない。世界に生きる者は誰だって、『そう』なる可能性を秘めている。

物心がついた時には、隙の突き方を教わった。

少し脳が発達してくると、それらしい道具の扱い方を教わった。

やがて精神が安定してくると、世俗との関係を完全に断ち切った。

富を生み出す一般社会とは異なった経済方式――何かを創造するのではなく、奪い消し去る仕事。

同業は皆、それぞれの思想に基づく形はあるものの、その行為に対する情熱だけは真剣そのものだったと思う。

責任、矜持、愉悦、快楽。

逃避、罪悪、贖罪、私憤。

組織における仲間との日常のため――などという、奇特な者もいた。

俺は、そのどれにも属さなかった。

何に引き換えても達成しなければと思ったことはない。自分を特別だと思ったこともない。遊戯の感覚で行った覚えもない。

怯えるべき過去がない。償うべき相手がない。感情を揺るがすだけの興味がない。

故に俺は、真っ当な道から外れた屑達が集い形成する社会の中でも、更に真っ当な存在でなかった。

その結果が。

――この様か。

「悔いは、ねえな……」
悔いるような想い出もない。
雨。曇天の下。寂れた商店街の路地裏で、腹から大量の血を流しながら、自分に言い聞かせるように呟く。
元々人通りが少ない上にこの天気、加えて前後の店は経営しているのかどうかも分からない廃れっぷりだ。
自分が息を引き取るまで、もうこのまま、面倒なことは起こらないだろう。
下手人は逃げた。周到な手際だ。だがそれは、俺自身が世間から目立つような行為を避けるよう努めて動いていたからということもある。
本当に腐った人間が力を持てば。
――どうしても対抗出来ないことはある、だったか。
「……」
顔を上げて、空を見る。雨の勢いは決して強くないが、終わりの予感を告げるには十分相応しい。
屋根に仕切られ、切り取られて一層高くなった雲を眺めながら、俺は記憶を反芻する。
――恰好つけたところで、何がどうなるわけでもあるまい。
一つ。
俺のほぼ空虚とも言える所業やそれに基づいて形成された過去の中で、一つだけ、鮮烈な印象となり脳に焼付いて離れない出来事がある。
そして、それが恐らく俺の人生の節目。
言うならば、このような顛末を辿ることになった初めの契機。
だが。それに憑りつかれたからと言って、俺の行動が何らかの貢献をしたかと言えば、決してそうではないだろう。
結局俺が、『誰かの役に立てたと思った』のは、後にも先にも、その一瞬だけだった。
「あの……」

声がする。まだ何かあるのか。俺は緩慢に視線を動かす。
女だ。当然、傘を差している。人形のように切り揃えられた髪に、身長に不相応な幼さが残る顔。
そこで――俺は、驚愕した。
「生きてはいる、みたいね」
雨避けもせず路地裏に座り込んで動かない奇矯な男に、制服を着た少女が水溜まりを歩きながら近づいてくる。
そして、目を開いて硬直した表情などには目もくれず、俺の傍らに雨と血が混ざって出来た池を眺めた。
「これ、危ないんじゃないの？　病院とか行かなくていいの」
「あぁ」
異様な光景をものともせず平然と問う女に、我を取り戻した俺は答える。
声が掠れる。力が入らない。
「いい。どうせ助からねえ」
「そう」
でも――と女が言う。
「わたし、つい最近、成功率二割の生還を果たした友人が居るの。だから、同じような奇跡が起こらないかな、とも思うわよ」
「ならその祈りはお友達の為にとっておけ。すぐに全快とはいかねえだろうからな。最早俺には、それに応えられるだけの器がねえ」
そう、とやはり女は素っ気なく言った。
人の死に際なら、そしてそれを目の当たりにする嵌めになった人間の反応なら腐るほど見てきたつもりだが――。
世も末だな、などと冗談めいたことを言おうとして、開き掛けた口を閉じる。
そんなことを言う資格も、無いような気がした。
「分かったらさっさと行け。俺はこのまま、充電切れの玩具みたいに時間を掛けて眠るだけだ。お前くらいのガキが思いつくような、劇的な展開なんぞ起こらねえからよ」

「別に、そんなこと期待しちゃいないわよ。ただ……」
あなた、何か話したそうだから、と女が言った。
話したそう？　俺が？　何を？
女が俺の眼を覗き込む。必然的に俺も女の瞳を見るかたちになる。
やはり再び――驚愕した。
まるで、あの人が、目前に戻ってきているかのようだった。
似ている。光彩や造形の問題ではなく、奥に宿る強い意志とでも言うか――一見では分からない、瞳から放たれる濁りのない光。
自信に溢れているような。不安に怯えているような。覚悟を決めたような。そんな瞳。
無いの？　言いたいこと、と女がしつこく問いかける。
「今際の際に遺したい言葉とかさ、わたし、一度聞きそびれてるから抵抗はないわよ。わざわざこんな場所まで来てくれたんだから、これ幸いと話しちゃえばいいじゃない」
この女、物怖じしないとか心臓が強いとかいう以前に、目上の人間に対する礼儀がなってない。
そこも――あの人に似ている。
だがいずれも、不思議と嫌悪感は沸かなかった。
全て分かっている上での態度なら、それも――。
「……大して面白い話でもねえけどな」
自然、先程思い出していた記憶を、もう一度呼び起こす。
気が遠くなるほど長かったような、花火のように儚く短かったような、自分の年齢さえも判然としない人生の中で培われた、唯一と言っても過言ではない想い出。
他人に打ち明けたことなど一度としてなく、それが許される環境に居たこともなかった。
雨の冷たさも感じられなくなるほどの瀬戸際になってようやく、俺は自分の口からそれを語り始める。
曖昧模糊とした風景を言葉に変換していく内に、それはより一層鮮烈なものとなって俺の前に姿を現した。

――どれだけ昔のことだろうか。
「……とまぁ、これが今回の標的の特徴だ。大丈夫か？」
「あぁ、必要な情報は全てインプットした」
標的の外見的特徴。住んでいる場所。よく通る道とその時間帯。
メモもとらず、頭の中で何度か繰り返し、俺は電話越しに伝えられた情報を完全に覚える。
大したことではない。そういう風に教わってきた。勉学に応用させるのは、恐らく不可能だ。その程度の能力だ。
「依頼者は同級生だってよ。余程の金持ちで事情通の間抜けなんだろうな。高々後一年ちょっと、仲良くしてれば他に有意義な使い道も見つけられただろうに」
「仕事に必要のない口を挟むなよ。お前はいつも喋り過ぎる」
「はいはい。期限は今日から一週間。ま、いつものようによろしくやってくんな」
そう言い残して、通話が切れた。
ごく普通の家が建ち並ぶ住宅街。取り巻く空気は完全に停滞し、全ての呼吸が寝静まった深夜。電灯の真下に立ち、明かりに照らされながら、何の警戒もせずに携帯電話をしまう。
傍から今の光景を見ていて、物騒な予兆を感じることが出来る人間は限られている。普段俺達は、その存在を世俗から徹底的に隔離し、闇に紛らせて動くからだ。
手順は三つ。窓口の人間が依頼を受け、命令された人間が実行し、最後に隠蔽役の人間が駆けつける。
俺は、二番手だ。貰った情報を頼りに、まずは標的の家を確認する。
歩を進めるのと同時に、俺は考える。
人の命を奪うとは、一体どういうことなのだろうか。

そして、振り出した足が満足に動かない内に結論が出る。
それまで意志を持って動いていた一つの物体が、動かなくなることだ。
――このような生産性の欠片も無い、無為極まる思考を、どれだけ繰り返してきたことだろう。
こういう時に、自然と浮かんでくる命題も一つしかなければ、それに対する答えもまた常に単調だった。
考える脳が無いからと言えば、それは恐らく正しい。俺に出来るのは、話を聞いて、居場所を突き止めて、タイミングに合わせて引き金を引くことだけだ。
ではなぜ同じ問いを何度も浮かべるのかと言えば――それはきっと、自分自身の回答に得心がいってないからだろう。
だがその期待とも苛立ちともつかない奥底の衝動に、ちんけな脳味噌しか持たない俺はやはり応じることが出来なかった。
人の命を奪うとは、一体どういうことなのだろうか。
それまで意志を持って動いていた一つの物体が、動かなくなることだ。
人の命を奪うとは、一体どういうことなのだろうか。
人は――。
人とは、一体『何』だ。
「……ッ！」
俺はそこで進行を止めた。そして、少しだけ眉を顰めて正面を見る。
正面には。
「ん？」
目前で、唐突に立ち止まった男に対する不信感が如実に表れた顔をしている、一人の女。
少女として見るには落ち着いていて、女性として見るには雰囲気に軽快さを感じる――取り澄ました猫のような、女。
彫刻のように均整の取れた身体。作り物のような、近寄り難い美

しさを醸す顔。
腰まで届くかというほど馬鹿に長い、艶のある黒髪。それを見れば一目瞭然とまで言われる、身体的特徴。
「私に、なにか用かな？」
女は俺の眼を見てそう言うと、何の返事もしない俺を怪訝そうな表情で眺めながら、横を通り過ぎていく。
片手に小型の鞄をぶら下げて、実に気儘に、この世の全てのしがらみから、地上にかかる重力から解放されたような自由を感じさせる足取りで離れていく。
周辺に明かりの点いている家はない。死角に入るまで尾行する。
やがて、条件は整った――俺は懐から消音機の内蔵された銃を取り出す。
事が済めば後は信号を送るだけだ。一分と経たない内に隠蔽係が到着し、標的はめでたく行方不明扱いとなる。
これだけ早く出くわすのは、幸か不幸か。
人が何だ。命が何だ。
答えなど出なくても、俺のやることに変わりは無い。
「キミは運がいい」
「！？」
振り向きもせずに突如、女が余裕を感じさせる声色で言った。
「後一日遅かったら、絶対に目的は達成出来なかっただろう。私は二度と、この近辺には現れなかったからね」
虚を突かれたのは俺の方だった。これまでの依頼と、全く同じ方法を行っていたはずなのに。
どうして、気付かれたのだ？
「キミは、一体何だい？」
女の身体が半回転する。硝子のような顔には猫のような笑みを浮かべていて、背中に月を背負っている。
引き金を、引けなかった。
「殺し屋だ」

「ほう。それは危ない」
馬鹿正直に答えてしまう。どうせ殺してしまうのだから同じことだ。それとも――。
少なくとも、これまでに一々相手の質問に付き合った経験は無かった。
女はそれを聞くと、顎を抑えて何かを考えるような素振りを見せ、やがて顔を上げてこう言った。
「大抵の人間が空想でしか耳にしない『そんなもの』が、本当に存在しているというのなら、神様だって居たっておかしくないのかもね。それとこれとは、話が違うのかな？」
「何を言ってやがる」
「子曰く、虎穴に入らずんば虎児を得ず、ってね」
場に流れる奇妙な空気に戸惑う俺の前で、女は声を出して笑ってみせる。
「ツァラトゥストラはかく語りき、でもいいや。なんとなくかっこいいじゃないか。とにかく私は、これを試練と捉えることにするよ」
女が笑う。幕が開く。
そしてこれが、俺の生涯における最初で最後の――。
「『たかが』殺し屋を退けられないようじゃ、神様を語る資格は無いだろうからね」

殺し屋の瞳―2

「一つ、提案がある」
あの世とこの世の狭間に住んでいるような、空と海の結び目に住んでいるような、月と太陽の境に住んでいるような、実に身軽で、不遜で、人間離れした美貌を有する女だった。
「ゲームをしようよ、殺し屋さん」
「ゲーム？」
しかし、俺は女が纏っているその超然とした雰囲気の中に、一つだけ、哀しいくらいに人間らしい衝動を内包していた箇所を見つける。
瞳だ。
その眼球に宿した光は、とても情熱的で、ある種狂信的で――どう足掻いても逃れられない何かを悟り、己を奮い立たせているように感じられた。
それが、期せずして目前に現れた不確定要素――自らを害すると宣言した俺に対して放たれたものではないことも、同時に察していた。
最初から視界になど入れていないとでも言うように、いや。
自分がこの危機を乗り越えられることを、既に承知しているかのように。
「そう。今から一時間以内に私を殺せなかったら、もう金輪際関わらないと約束してくれ。鬼ごっこみたいなものだね。範囲はこの住宅街の中のみ、もし私がルールを破り、少しでも開けた場所に逃げたら、これから先も好きに追い回してくれて構わない。殺すまでね」
どうかな？　と女が問う。
俺に、そんな身勝手に付き合う義理はない。今ここで、指をかけた引き金を引いてしまえば仕事はあっさりと終わり、この会話も夢のように忘却の彼方へと過ぎ去る。

だが、自らの心中が発する疑問にすらまともに取り合うこともせず、曖昧な生き方によって形成された記憶は常に不安定で、社会の外れ者の集団の中に居ても更に浮いてしまうような俺の性根は。
無意識の内に、それを了承していた。
「始める前に、一つだけ聞かせて貰う。お前、神様がどうとか言ってたが……」
口が別個の意志を持ったように尋ねる。
「そりゃ一体、どういう意味だよ」
「別に、言葉の通りの意味さ。森羅万象の根源であり全知全能の支配者であり永久不変の絶対存在、そんな生物になりたいんだ、私は」
「ふざけてんのか」
「本気だ」
そして女は、その瞳を一層強く滲ませて。
「――本気なんだよ」
鞄を両手で抱え上げ、自身の顔面を庇う様に構えた。
引き金にかけた指が動く。空気が抜けたような音と共に、銃弾は真っ直ぐ女の心臓へと狙いを定め――。
その身体に、命中した。
「あ……？」
即座に大気に混ざって聞き逃してしまうほど、微かな呻き声を上げて女が倒れる。
その瞬間、何だかここに至るまでの全ての経緯が、女と出会ってから感じ続けていた妙な浮遊感が幻想だったような、冗談のような想いに駆られた。
つい先程までこの場を渦巻いていた言葉にし難い雰囲気が、たった一度の銃声で収束してしまった。
安堵と落胆が混ざった心境になり、俺は仰向けに倒れた身体に近付く。
念の為に頭も潰しておくのは、いつものやり方だった。
――光源が月の他に存在しない、視界がほぼ暗闇の配下にあるよ

うな環境だったからだろうか。
――女の倒れ方が、あまりに演技に長けていたから？
いや、それは違う。俺はその時になって、ようやく自分の愚かさを認識した。
女の胸から血が流れていないこと、それ以前に。
――初めに察知されたのが何時だったのかを、気に留めるべきだった。
「ッ！」
女の傷を確認出来る距離までの接近を果たした時だった。突然陶器のような脚が伸び、俺の足元を掬い上げる。
無論、対処が間に合わない筈がない。隙を突かれたにせよ、重心を素早く取り戻すことで転倒は避けた。
同時に、ほぼ真下に向けて発砲する。女は消えていた。弾は地面に罅を作り転がっていく。
そして。
「チェックメイトだ」
背後に立っていた女に銃を握っていた方の腕を取られ、強引に背中側へと回された。
鈍い痛みと共に力が抜け、黒色の撃鉄は虚しい音を立てながらコンクリートの上に落ちる。
「お前……！」
「人を見かけで判断してはいけない。人生の基本だね」
勝ち誇った態度を微塵も隠そうとせずに、女が解説を始める。
「うまい具合に嵌ってくれたみたいで良かったよ。あのような制限を設けたのは、こっちの立場を弱いものと見せかけ、対抗手段が逃亡しかないように錯覚させるため」
そして、と女がもう一度力を込めた。
「鞄で顔を隠せば、無意識に人は空いている方の急所を狙うだろう。特にキミは真面目そうな顔をして、こんな誘いに乗ってくるようなタイプだ。必要以上に甚振るような真似をするようには見えなかっ

たし、きっとあそこに撃ってくると思ったよ」
「内側に、何を仕込んでいた」
「ははは。私は元々胸が無いからねぇ、気付かないのも無理はない。なに、大したものでもないよ」
結局、その具体的な正体については聞き出すことが叶わなかった。
さて、と、女の声色が徐々に蠱惑的なものへと変わり、吐き出される言葉に魔力が宿る。
「どうする？　何か奥の手があるなら使ってみるかい」
生憎と、この日に限って予備がない。
それも――巡り合せだろうか。
「無いなら、都合が良いね。キミの良心に問うよ。ここで負けを認めて、二度と私を狙わないと誓ってくれ」
「待て」
交わした約束のことなど、どうでもよかった。そんなこととは関係なしに、俺はこの女を殺すことを諦めかけていた。
これから俺が発する問い、そして神を目指すこの女がそれにどう答えるか、その結果起こることを、薄々感付いていたからかもしれない。
「……お前は、人って何だと思う？」
「ん？」
「答えることが出来るのか」
すると女は拘束を解き、加えて落ちている銃にも触れず、俺と正面から向き合った。
全知全能を語る女。憂き世の鎖を振り解きつつも、その瞳に悲哀と激情の色を宿した女。
所詮それらは全部、稚拙な脳味噌しかない俺の印象だ。だが――。
「人は、人だよ」
女は言う。拍子抜けするにはまだ早い。
「感情に動かされるまま、笑って泣いて怒って悩む生き物だ。それ以外の何でもない」

「感情？　一応、動物の中では最も理性的っつー触れ込みになってんじゃねえのか」
「大体の場合、感情の上にそれらしい理屈を並べているだけだね。正当性なんてものは立場に拠ってころころ変わる。その根底にあるのは常に個人の嗜好や美徳や価値観だ。万人が納得する『本当に正しいこと』なんてこの世には存在しない。そのことに気付かず、キミの言うような妄想に憑りつかれて、利用され傷付けられる人は後を絶たない」
　また――あの瞳だ。
「けれど、被害者である彼らもある種の愚か者ではあるんだよ。理性的であるとは、人間らしさとは……その輪郭すら捉えられていない分際で、漠然とした偶像に合わせて振る舞おうなんて土台無理な話さ。そうやって勝手に自分を追い込んで、感情のままに動き回る人間に馬鹿にされ罵られ搾取されて、全くもって憐れだよ」
「難しい話はよく分からねえが」
　瞳が。
「神様は、そいつらを救ってやるのか？」
「理由がどうあれ、辛苦に苛まれる人間を放っておく道理はないからね」
「俺は、殺す。金の為に。生きる為に」
「私の神様は、死人に関与することは出来ない。悪いけど、可能ならそれはキミの方で処理して欲しい問題だ」
「責めないのか」
　その権利がない、と女は断言する。
「実際に起こった死という現象に対して、何らかの感想を抱けるのは生き残った人だけだ。当人の気持ちなんて知りようがない。だから分からない。果たしてその人は、幸福だったのか、不幸だったのか」
　悲しいのか、嬉しいのか。
　泣いているのか、喜んでいるのか。

話している内に、女は自嘲するように儚く微笑んだ。
「こうしてみると、神様も中々万能じゃないね。いや、人であることの限界ってやつなのかな」
「最後に、一つだけ聞く」
人とは、人だ。そこに特別な意味などなく、不可侵の魔境などというものが秘められているわけもない。
死とは、死だ。そこに勝手な意味づけをするのは生きている人間だけで、当事者は即座に自分達の手の届かない場所へと運ばれている。
ならば。
「人の命を奪うとは、一体どういうことだ」
そして俺は目の当たりにした。この女という存在の中で、唯一人間らしい面影を残していたその瞳が。
奈落のように深く、深く沈んで――。
「私の敵になるということだよ」
「――」
――俺の心は、ちっぽけな疑念にひたすら息を吹き込んでいた俺の魂は。
そこで、脆い硝子のように砕けて散った。
「私の世界から、勝手に人を連れて行くんだ。どうして私に、それを憎まないわけがある」
「……そうか」
そうか、ともう一度繰り返す。壊れた玩具のように。
女は鞄を拾い上げると、さぁもういいかい、と、この場を立ち去ろうとする。
俺は言う。
「俺は暫くここを動かねえ。タクシーでも電車でも好きなもんに乗って、好きなところへ行け」
「こっちは最初からそのつもりだったさ。もう電車は無くなったよ」
足音も無く、気配だけが遠ざかる。

途中で、女は一度止まった。
ああ、そうそう――と、最後に言葉を残そうと。
「私は、キミの義理堅さに感謝しなければならない。この場を見逃してくれることも、手段を選んで付き合ってくれたことも」
俺は振り返ることが出来なかった。二度と自分は、あの女を見てはいけないような気がした。
「もしキミが本気で形振り構わず私を殺そうと思ったなら、抵抗の術は無かったよ。度を超えた暴力に対して、人はあまりにも無力だ」
派遣されたのがキミで良かった。これも導きってやつかな。
そう言い残して、女は場から完全に消え去った。
「……」
黙っていれば、一週間は露見しない。それを理解しておきながら、俺の足は徐々に回転を速め、やがて走り出していた。
――人を殺すということは。
神に逆らうということか。
途端に、数多の血に濡れた利き腕が震え出して。
知らぬ間に、己の両眼を堅く瞑っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3280z/

死にたがりの声

2011年12月20日19時46分発行